
彼女の記憶

椎野柚香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の記憶

【Nコード】

N6325B

【作者名】

椎野柚香

【あらすじ】

再会を約束をし、彼女が一家で渡米してから五年。僕の知る限りずっと彼女からの連絡はなかった。当然の如く、僕は彼女との再会をほぼ諦めていた。しかし、彼女の十五回目の誕生日が近づくにつれ、僕は突然悪夢に魘されるようになる。そして、彼女の誕生日を一ヶ月前に控えた十一月の第二火曜日。その日もろくに睡眠をとれていなかった、そんな僕にクラス一の情報通である谷口敬太は、思ってもみなかった情報を持ちかけてきたのだった。

プロローグ

よく見る夢がある。

見終わったときには、必ず僕は魘されている。汗をびっしょりかいて、シーツまでも濡れてぐしょぐしょになっている。絞ったら、コップ一杯の汗が出るかもしれない。

その夢は、実にシンプルな内容で、ひたすら鬼ごっこをしている夢だ。

決まって、僕が鬼。

そして、もう一つ決まっていること。

夢の中の僕は小学校低学年くらいの僕ってこと。どうして、小学校低学年くらいの自分だって、わかるかって。そりゃ、わかるさ。自分のことなんだから。背丈もそうだし、何より、僕は小学校四年生まで眼鏡をかけていたから。黒くて細いフレームで縁取られた、四角いレンズの眼鏡。幼い顔には、その眼鏡は不釣り合いで、印象が大きすぎた。結果、その頃の僕のあだ名は、めがね君だった。

僕は、もう動き出してもいい頃かな、と思い、これが合図だとでもいうように、ずれてきた眼鏡を右手で押し上げた。

「もういいかい」

「まーただよー」

「もういいかい」

「もういいよー」の合図で、鬼である僕は動き出す。

みんなはどこに隠れただろう。ここか。それともこっちか。思考回路をフル回転させる。

「小田切君、みーっけ」

「太一君、みーっけ」

「奈央ちゃん、みーっけ」

次々と、標的を見つけていく僕。容姿は小学校低学年でも、夢を見て鬼を操っているのは、この僕。ちっちゃい子に負けるはずがな

い。いや、負けてたまるもんか。

「吉沢、みつけ」

ラストスパートを切る。もう勢いは止まらない。

ある種の快感。

残りもラスト一人となる。

でも、どうしてもその一人が見つからない。どこを探しても出てこない。

そのうち、日が暮れる。最初にみつかった子たちは、だれてきて、「まだかよー」

「早くしろー」を連発している。あと一人、あと一人、という掛け声をかけるものはいなくなった。

一人の子は、公園を出て行ってしまった。誰も呼び止める子はいない。みんな好き勝手に遊んでいる。僕ももう正直どうでもよくなくなっている。

「今日はこれで解散だー」

と言われたら、喜んで鬼ごっこを止めただろう。最後の一人だつて、解散となれば、ひょこひょこ現れるはずだ。

よし、ここは僕が自ら解散を提案してみよう。

僕が意を決した、その時だ。

先ほど公園を出て行った女の子が悲鳴をあげた。

なんだなんだ、と声のした方につける僕たち。

そこにいた。いや、あったのは、僕がずっと見つけ出せないでいた最後の一人の抜け殻だった。彼女は、ルールを破り、鬼ごっこをしていたはずの公園を後にし、その直後車に引かれていたのだ。それからだいぶ時間が経っているのか、まわりの血は赤黒い固体となっていて、彼女の体は頼りなさげに横たわっていた。

僕はそつと、彼女の体を起こす。首はまるで、首の据わっていない生まれたての赤ちゃんのようにだらんと垂れ下がり、体は当たり前だけど、冷えていた。正気はない。

が、彼女の顔はかすかに笑っている気がした。

そして、初めてそこで気づくのだ。

その子の最期の顔が、きみが僕に見せる顔にそっくりだってことに。

決して、その子はきみに似ているわけじゃないけど、僕はその夢を見るたび、きみを思い出す。そして、不安になる。五年前にまた逢おうと約束し、さよならして以来、きみは今一体何をしているんだい。

プロローグ（後書き）

小説を執筆し始めてから年が浅い為、文章の構成の仕方、言葉の使い方等に間違いがあるかと思いますが、自分らしい文章を書こうと日々努力しています。
どうぞ宜しくお願いします。

第1話 谷口の情報（前書き）

ここからが本編といった感じですよ。

第1話 谷口の情報

—

「悠一、ニュースだニュース！」

十一月の第二火曜日の朝のホームルーム前、僕はクラスーの情報通（マニアというと、本人が怒るから）である谷口敬太に声を掛けられた。

ここ最近、ずっと悪夢に魘され、ろくな睡眠をとっていない僕の下には隈が出来つつある。そんな寝ぼけ眼で僕は訊いた。

「朝から何の用だよ。おはよふの挨拶もなしに」

「だから、ニュースだ！つつつてんだろ」

谷口は目を輝かせ、「しかも、お前にとっちゃ人生最大であること間違いなしの、とっておきのやつだ」と付け加えた。

「ソレ、またお前の得意なデマだろ」

谷口の情報はまだであてにならない。

これは僕が谷口と長年付き合ってきた上で思うことだ。奴の情報を信じると痛い目に合う。人を信じることは大事なことだけれど、すぐに心を許すと駄目だ。これも奴と付き合ってきたと思うことだ。結構、世の中、俗に言う世間一般にも通用するんじゃないか、とも思う。

「何だよ。この俺の情報を疑うつてのか」

「ああ、信用なしだよ。できれば、他をあたってください」

「このネタは、お前限定なんだ」

「お得意様限定ネタ、ってことか」

「んー、まあそうだな」

谷口の口調からすると、まだいまいち乗り切っていない客にあまり煮えきっていないようだったが、返事を待たず、奴は話し出した。相当、喋りたがっていたらしい。

「昨日の夕べに母さんが言ってたんだけど、1週間後に向かいの里中さんが帰ってくるんだってさ」

「マジ」

「おう。情報源が俺の母さんだからな。俺の次に信用できる」

「あ、そう」

突っ込むのもめんどくさい。眠いし。

何より、僕は奴の持ち出してきた情報に夢中だった。

「そっか。ゆづるが帰ってくるんだ」

「あ。今何かいかわしいこと考えませんでした」

「お前じゃあるまいし、考えるわけねえよ」

「でも、里中家が渡米したのって、確か俺らが小5のときだから、5年前っしょ。あれから、5年の月日経ってるんじゃないや里中もえらいことに……ふふ……ふ」

最後のぶ、は別に奴が鼻血を出した。とか、そういうオチではない。僕が一発頭を殴ってやったのだ。

いつてえ、とか嘆きつつ、まだ飽きもせず奴は「里中がアイドル並みに可愛くなってたりしたらどうする？」とか抜かしている。

「今度は、その口きけないようにへし曲げてやろうか」

「いえ、間に合ってます」谷口が急に真顔になって言う。何が間に合っているのか、理解不能だ。

「でもさ、いやほんとに冗談抜きでさ、里中が美少女になってたらどうするよ？そしたら、学年、いや、学校中の野郎たちの注目のだぜ？美少女転校生。なんとなく響きのにもエロくね？学校ではきつちりと校則守って中学生やってるくせして、裏では何人もの愛人がいんの。何しろ、美少女転校生だから」

「それ以上言うな、脳が腐る」それに、と僕は言う。

「アイツはそんな子じゃないだろ。とにかくいい子なんだ。お前も知ってるだろ」

「ああ。……それにしても、真に受けんなよ。悠一って意外と神経質だよな。俺じゃついてけない」

「お前が楽天的過ぎるんだ」

「そんなもんかね。まあ、里中がどんなになつてたとしても、里中は里中だしな。中身がまんまじゃ、必然的に愛人の線は消えるか。つまんねえの」

「お前の頭はそんなことしか考えられないのか」

「ん。まだまだいろいろあるぜ。もち、愛人って線が抜けただけで美少女転校生つてのは消えてない。巨乳、ロリシヨタ……それから……いゝ。や、やめろ、ゆういちー」

今度は唇の端を容赦なく引っ張ってやった。これでさすがに奴も懲りるだろう。きつと。

第1話 谷口の情報（後書き）

「彼女の記憶」第1話目です。文章がこんなでも、至って本人、真面目に書いています。（汗）宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6325b/>

彼女の記憶

2010年10月16日04時57分発行